

「中途退学の原因」因子と「心理的支援」因子の因果関係に関する検討

“Cause of the school-leaving” The reviewing about the causality
of the factor and “the psychological support” factor

杉山雅宏（東京家政大学非常勤講師、東北薬科大学）

Masahiro SUGIYAMA (Tokyo Kasei University, Part-Time Lecturer, Tohoku Pharmaceutical University)

要 旨

調査研究により抽出した、「中途退学の原因」因子と「心理的支援」因子の因果関係について、高校生・中途退学者・教師・保護者それぞれが求める心理的支援のあり方が、どのような中途退学原因に影響しているかについて検討した。教師は、タテマエでは中途退学の原因として、「対教師関係」が影響を及ぼしていることを認めたくはない。しかし、実質的には、自分たちの対応の仕方次第で、中途退学の原因に影響を及ぼしていることを認識していることが明らかになった。教師は、社会に対して助けを求めている。少なくとも、生徒理解に関する仕事については、専門家の支援を受けたり、学校外資源を有効活用したりすることにより、自分たちが、今以上に、生徒に手厚く関わるができるようになりたいと願っている。学校システムを柔軟にすることが、教師の対応の改善につながることを、教師自身が認識しているという新たな知見を得ることができた。

Abstract

Teachers seem unwilling to admit that the poor relationship between teacher and student is one of the reasons why some students drop out of school. However, this survey shows that many teachers I surveyed, actually know poor communication between teacher and student sometimes discourages students from continuing their studies at school and that the teachers are looking forward to getting good advice from many people. This survey also shows the teachers believe that making the school system more flexible will enable them to receive support from education experts and to make good use of human resources outside school and that it will eventually lead to a good understanding of their students and improvement in education.

キーワード：対教師関係、柔軟な学校システム、教師の対応の改善

Key words : the teacher relation, a flexible school system, a good understanding of their students and improvement in education

I 目的

杉山、2007a、2007b（平成 19）年は、高校中途退学の原因及び、その予防のための心理的支援に関する調査研究で、「中途退学の原因」因子として、「高校生活への不満」「個人的理由」「対教師関係」「対人関係」の 4 因子、「心理的支援」因子として、「規則の緩和」「教師の対応の改善」「柔らかな学校システム」「教師の歩み寄り」の 4 因子をそれぞれ抽出した。また、抽出された因子に高校生・中途退学者・教師・保護者各群の影響度についても検証した。「中途退学の原因」については、高校生・中途退学者と教師の意識の違いが明らかになり、特に、高校生・中途退学者は「対教師関係」の影響度を強調していた。「心理的支援」についても、教師は学校の枠を柔軟にすれば、中途退学予防に資すると考えているが、高校生・中途退学者は、目の前にいる教師に期待を寄せており、ここでも意識の違いが明らかになった。

杉山・楡木、2010（平成 22）年は、中途退学者の語りの分析から、まずは個性を尊重され、自己と向き合う時間的なゆとりを与えられることで、自己成長を遂げることができることを明らかにした。彼らが「学校生活・学業不適応」になったのは、学校や教師が柔

軟な対応に欠けていることも一因であると語り、自分たちは「最初から不適応ではない」ことを強調する。特に、学習形態は、学校内だけでの課題解決にとらわれず、通信制学習の併用等幅広い学習を認めて欲しいという奇抜な発想を提供する。心理的支援システムを学校内に構築するために、教師は自由な発想のもと、あえて枠を超えようとするのが意識変革のきっかけであることを示唆する。

また、杉山、2009（平成 21）年は、中途退学者へのインタビューから、教師の意識変革を促すためには、教師が生徒を敬い、極力対等な関係性を保ち、生徒を人として尊重しながら支援に当たることが重要であることを明らかにした。教師は「こうでなければいけない」という考えを捨て、教師主体の教育から、生徒主体の学習をより重視する方向転換の必要性を示唆している。学習者が学習しやすい環境を作っていくことが中途退学の予防のために有効であるという重要な示唆を得た。これら質的研究からの成果は、単に中途退学者は教師に対して批判的であると捉えるのではなく、杉山、2005（平成 17）年が指摘するように、教師に対する期待の声と捉えるべきである。そうすると、教師が生徒の期待に応えるための環境整備をすることが、中途退学予防のための心理的支援効果を高める決

め手となる。

一方、杉山、2006（平成 18）年による高校教師の中途退学への賛否に関する調査によると、実は教師も中途退学に対しては基本的に反対しており、卒業に向けて何とかしてあげたい、学校で何とかしなければならぬという熱い教育的情熱や愛情を持って、中途退学予防に取り組もうとしている一面があることも明らかにされている。

そこで、本研究では、因子分析により抽出した「中途退学の原因」に関する 4 因子と「心理的支援」に関する 4 因子の因果関係を検討する。高校生・中途退学者・教師・保護者がそれぞれ求める心理的支援のあり方が、どのような中途退学の原因に影響しているのかを分析することが目的である。特に、統計的見地から、それぞれの立場の原因・支援因果モデルを検討するなかで、質的研究からは確認できる教師の本音、すなわち、本当はもう少し生徒への対応を改善したいという願いの部分を抽出できれば、心理的支援策策定の方角性がより明確になるものと思われる。

II 方法

1. 調査用紙の作成と調査時期

本調査協力校私立 A 校生徒の協力により、「あなたはどうして高校生が中途退学していくと思いますか」（以下、『中途退学の原因』とする）に関する自由記述の回答を得た。さらに、文部省初等中等教育局高等学校課、1998（平成 10）年を参考にして、『中途退学の原因』30 項目からなる調査用紙を作成した。調査は、平成 x 年 7 月下旬から 10 月上旬に実施した。

2. 調査方法と対象

高校生は各校先生により集団法で実施した。教師は、各校管理職を通じ調査を実施した。中途退学者は、筆者との面接の中で実施した。保護者は、事前に協力を

得た家庭を筆者が訪問し、回収した。

北関東 G 県内の公立 2 校・私立 2 校に在学する高等学校 2 年生 680 名、公立高校教師 140 名、私立高校教師 200 名、中途退学者 121 名、保護者 120 名計 1261 名から回答を得た。そのうち欠損値の目立って多いものを除いた 1218 名（96.6%）を分析の対象とした。この有効回答全体の構成人数を Table 1 に示した。

3. データの処理と解析

（1）因子分析

高校生・中途退学者・教師・保護者をひとまとめにし、「中途退学の原因」・「心理的支援」について、因子構造の分析を行った（主因子法・バリマックス回転）。因子分析の結果は Table 2、Table 3 に示す。

（2）Cronbach の α 係数の算出

それぞれ抽出された因子の信頼性を検討した。

（3）一元配置の分散分析と多重比較

抽出された因子の因子得点を、高校生・中途退学者・教師・保護者等において比較し、差を検定した。高校生・中途退学者・教師・保護者がそれぞれの立場でどの因子に重きを置くかを比較し、「中途退学の原因」・「心理的支援」の認識の違いを検証した。

（4）共分散構造分析

因子分析により抽出した「中途退学の原因」に関する 4 因子と「心理的支援」に関する 4 因子の因果関係を検討するために、共分散構造分析を行った。分析には、Amos 4.0 を使用した。多重共線性の問題を避けるために、以下の分析では、下位尺度得点ではなく、因子得点を採用した。

因果モデルを作成するに当たって、まず、公立高校生徒、私立高校生徒、中途退学者、公立高校教師、私立高校教師、保護者それぞれの因子得点間の相関行列を算出した。相関行列をもとに、それぞれ因果モデルを作成し分析した。本分析においては、公立高校生徒、私立高校生徒、中途退学者、公立高校教師、私立高校

Table 1 調査対象

対象	男性（人）	男性（%）	女性（人）	女性（%）	計（人）	計（%）	備考
公立 A 校	53	9.4	97	14.7	150	12.3	進学校
公立 B 校	54	9.6	95	14.4	149	12.2	実業高校
私立 A 校	59	10.6	90	13.6	149	12.2	課題集中校
私立 B 校	63	11.3	136	20.6	199	16.3	進学校
公立教師	104	18.6	35	5.3	139	11.4	G 県内公立教師
私立教師	133	23.8	63	9.5	196	16.2	S 県・G 県各 2 校
中途退学者	60	10.9	60	9.2	120	9.9	北関東私立 2 校
保護者	32	5.8	84	12.7	116	9.5	私立 A 校・私立 B 校
合計	558	100	660	100	1218	100	

Table 2 「中途退学の原因」についての因子分析 N = 1218

因子	項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
高校生活への不満	高校生活でやりたいことが見つからないから	0.733	-0.011	0.091	0.072	0.551
	高校生活で打ち込めるものがなくなったから	0.618	0.045	0.198	0.086	0.431
	生活のリズムがあわず、通学が面倒になったから	0.589	0.021	0.041	0.222	0.398
	授業内容が役に立たないと思ったから	0.527	0.077	-0.099	0.263	0.362
	自分に高校の雰囲気があわないから	0.509	0.141	0.279	0.155	0.380
	学校生活がすごく疲れるから	0.508	0.022	0.162	0.283	0.365
	高校に来る必要がないと思ったから	0.499	0.173	-0.056	0.156	0.306
	仕方なく入学した学校だから	0.454	0.127	0.122	0.125	0.253
	高校に来るより、仕事をした方が勉強になるから	0.450	0.292	-0.109	0.225	0.350
	中退していった友達が楽しそうに生活しているから	0.441	0.164	0.042	0.192	0.260
	サポート校や通信制の方がいいと思ったから	0.419	0.349	0.018	0.106	0.308
個人的理由	入学前後の高校のイメージが違ったため	0.413	0.173	0.240	0.263	0.330
	健康上の理由で通学が不可能になったから	0.044	0.697	0.209	-0.014	0.532
	家庭が経済的に苦しいから	0.101	0.643	0.178	0.026	0.456
	進級ができなかった（留年した）から	0.122	0.554	0.222	0.056	0.347
	校則違反を繰り返し、退学しなければならなくなったから	0.057	0.514	0.115	0.140	0.300
	出席日数が不足し、あきらめてしまったから	0.259	0.499	0.174	0.040	0.348
対人関係	家庭生活が混乱し、無気力になってしまったから	0.413	0.173	0.240	0.268	0.330
	友人関係がうまくいかなかったから	0.125	0.214	0.735	0.024	0.603
	教室に居場所がなかったから	0.064	0.255	0.694	0.068	0.555
対教師関係	友達ができないから	0.114	0.341	0.652	0.073	0.560
	先生が必要以上に注意しすぎるから	0.197	-0.001	0.017	0.744	0.592
	むかつく先生がいて耐えられないから	0.301	0.079	0.040	0.699	0.587
	校則が厳しすぎるから	0.337	-0.018	-0.028	0.545	0.411
	学校の先生がやる気を失わせるようなことを言ったから	0.220	0.271	0.173	0.530	0.432
	学校の先生との人間関係がうまくいかないから	0.287	0.126	0.314	0.452	0.401
	因子寄与率	14.301	10.364	9.014	8.576	
	累積寄与率	14.301	24.668	33.679	42.256	
	α 係数	0.829	0.810	0.855	0.794	

因子抽出法：主因子法；回転法：バリマックス回転

教師、保護者それぞれが求める心理的支援のあり方が、どのような中途退学の原因に影響しているかを調査することを目的としているため、外生変数を心理的支援因子、内生変数を中途退学の原因因子として因果モデルの検討を行った。

本稿では、(4) 共分散構造分析の結果について示す。

Ⅲ 結果

1. 公立高校生徒の因果モデルの検討

因子得点間の相関係数から、「規則の緩和」から、「高校生活への不満」と「対教師関係」へのパスを想定し検討を行った。その結果、支援レベル「規則の緩和」から原因レベル「高校生活への不満」へのパス (.32) 及び「対教師関係」へのパス (.39) が確認された。

モデルの適合度の指標は、GFI = .998、AGFI = .988 といずれも高い値が得られ、モデルの適合度は良好であった。支援レベルで「規則の緩和」という心理的支援を求める公立高校の生徒は、中途退学の原因レベルでは、「高校生活への不満」と「対教師関係」により影響を与えていることが明らかになった。

結果は、Table 4 及び Fig.1 に示した。

2. 私立高校生徒の因果モデルの検討

因子得点間の相関係数から、支援レベルの「規則の緩和」から原因レベルの「高校生活への不満」「対教師関係」へのパス、及び、支援レベルの「教師の対応の改善」から原因レベルの「対教師関係」へのパスを想定した。また、支援レベルの「柔らかな学校システム」と「教師の対応の改善」には相関関係があることも想定し、検討を行った。その結果、支援レベルの「規

Table 3 「心理的支援」についての因子分析 N = 1218

		因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
規則の緩和	学校生活全体の自由度をあげる	0.702	0.300	-0.082	0.205	0.631
	進級規程を甘くする	0.688	0.114	0.026	0.155	0.511
	自由通学で自分のペースで学べるシステムを作る	0.683	0.163	0.115	0.044	0.508
	規則を甘くして、規則でがんじがらめにしない	0.605	0.263	-0.038	0.107	0.448
	専門学校のように1つのことを徹底的に学べるようにする	0.512	0.088	0.309	0.108	0.377
	転入・転学がしやすいシステムにする	0.487	0.111	0.305	0.095	0.352
	科目選択をできるだけ自由にする	0.466	0.335	0.313	-0.024	0.428
教師の対応の改善	先生方は、生徒に対して偉そうに接しないようにする	0.360	0.632	0.092	0.000	0.538
	先生は、生徒の気持ちを勝手に決め付けない	0.083	0.565	0.128	0.180	0.375
	先生が、私たちの気持ちを真剣に聴くようにする	0.030	0.565	0.255	0.252	0.448
	先生方は生徒に対して乱暴な口のききかたをしない	0.198	0.555	0.145	0.146	0.389
	先生は、生徒のことを信頼する	0.192	0.526	0.164	0.246	0.401
	成績のみで評価をしない	0.289	0.505	0.252	0.087	0.410
	生徒・保護者も先生を評価できるようにする	0.265	0.494	0.235	0.008	0.369
	授業のやり方を工夫し、とにかく面白くする	0.257	0.445	0.196	0.281	0.382
柔らかな学校システム	学校の先生でない人にも先生として教育に参加してもらう	0.088	0.182	0.504	-0.044	0.408
	生徒同士が助け合える仕組みを作る	-0.007	0.251	0.531	0.283	0.425
	授業の中に、体験的な学習を増やす	0.138	0.334	0.491	0.173	0.402
	カウンセラーの人数を増やす	0.035	0.090	0.463	0.183	0.257
	クラスの集団を小さくする(20人学級等)	0.043	0.044	0.460	-0.022	0.216
	授業中は、先生と生徒が対話をできるように工夫する	0.226	0.274	0.454	0.330	0.441
	勤労体験(職場体験)も、卒業の単位として認めるようにする	0.332	0.330	0.435	-0.040	0.410
歩み寄りの教師	先生は、本当の友達のように生徒の相談にのる	0.201	0.377	0.141	0.662	0.641
	生徒と教師が友達のように過ごせる学校にする	0.316	0.248	0.129	0.572	0.579
	因子寄与率	13.970	13.572	9.788	5.774	
	累積寄与率	13.970	27.543	37.330	43.104	
	α 係数	0.831	0.832	0.754	0.771	

因子抽出法：主因子法 回転法：バリマックス回転

規則の緩和」から原因レベルの「高校生活への不満」へのパス(.34)及び「対教師関係」へのパス(.27)が確認された。支援レベル「教師の対応の改善」から原因レベル「対教師関係」へのパス(.37)も確認された。更に、支援レベル「教師の対応の改善」と「柔らかな学校システム」間に相関関係(.30)の存在が確認された。モデル適合度の指標は、GFI = .966、AGFI = .898といずれも高い値が得られ、モデルの適合度は良好であった。

結果は、Table 5 及び Fig.2 に示した。

3. 中途退学者の因果モデルの検討

因子得点間の相関係数から、支援レベルの「規則の緩和」から原因レベルの「高校生活への不満」へのパス、及び、支援レベルの「教師の対応の改善」から原因レベルの「対教師関係」へのパスを想定した。また、

支援レベルの「規則の緩和」と「柔らかな学校システム」には相関関係があることも想定した。その結果、支援レベル「規則の緩和」から原因レベル「高校生活への不満」へのパス(.37)及び、「教師の対応の改善」から「対教師関係」へのパス(.29)が確認された。また、支援レベル「規則の緩和」と「柔らかな学校システム」間に相関関係(.39)が確認された。モデルの適合度指標は、GFI = .970、AGFI = .925といずれも高い値が得られ、モデルの適合度は良好であった。

結果は、Table 6 及び Fig.3 に示した。

4. 公立教師の因果モデルの検討

因子得点間の相関係数から、支援レベルの「規則の緩和」「教師の対応の改善」から原因レベルの「対教師関係」へのパスを想定した。また、支援レベルの「教師の対応の改善」と「柔らかな学校システム」には相

Table 4 公立高校生徒の各因子得点間の相関行列

	高校生活 への不満	個人的 理由	対教師 関係	対人関係	規則の緩和	教師の 対応の改善	柔らかな 学校システム	教師の 歩み寄り
高校生活への不満	1	.083	.170(**)	.009	.318(**)	.058	.069	-.039
個人的理由		1	.087	.081	.047	-.03	.222(**)	.056
対教師関係			1	-.02	.386(**)	.246(**)	.075	.054
対人関係				1	-.172(**)	.096	.068	.03
規則の緩和					1	-.035	.146(*)	-.096
教師の対応の改善						1	.132(*)	.133(*)
柔らかな学校システム							1	.200(**)
教師の歩み寄り								1
* p<.05、** p<.01								

Table 5 私立高校生徒の各因子得点間の相関行列

	高校生活 への不満	個人的理由	対教師 関係	対人関係	規則の緩和	教師の 対応の改善	柔らかな 学校システム	教師の 歩み寄り
高校生活への不満	1	.157(**)	.299(**)	.062	.399(**)	.143(**)	.174(**)	-.09
個人的理由		1	.097	.218(**)	.103	.221(**)	.237(**)	-.003
対教師関係			1	.161(**)	.330(**)	.417(**)	.203(**)	-.014
対人関係				1	-.029	.245(**)	.177(**)	-.022
規則の緩和					1	.194(**)	.264(**)	-.07
教師の対応の改善						1	.303(**)	.086
柔らかな学校システム							1	.118(*)
教師の歩み寄り								1
* p<.05、** p<.01								

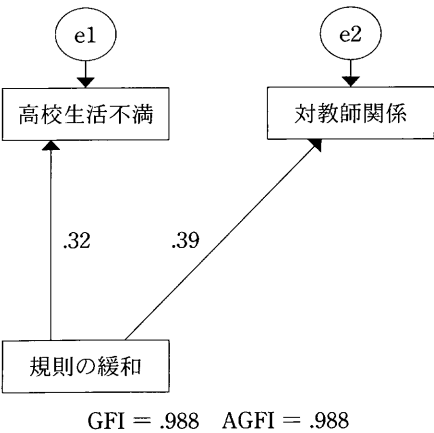


Fig.1 公立高校生徒の原因・支援因果モデル

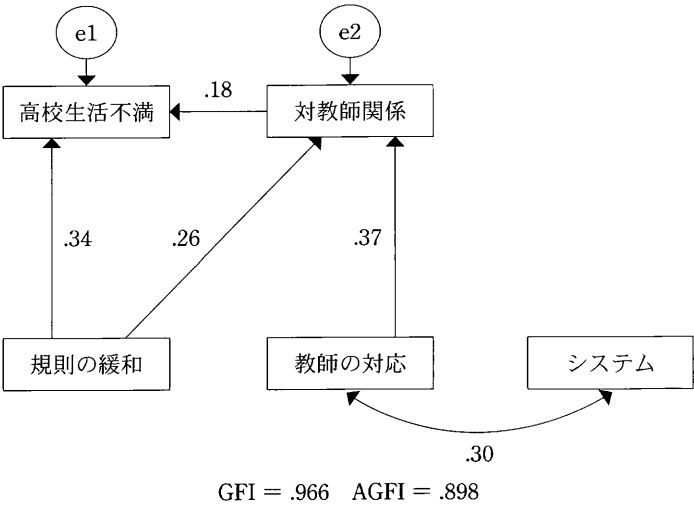


Fig.2 私立高校生徒の原因・支援因果モデル

関関係があることも想定した。その結果、支援レベル「規則の緩和」から原因レベル「対教師関係」へのパス (.34) 及び、支援レベル「教師の対応の改善」から原因レベル「対教師関係」へのパス (.42) が確認された。支援レベル「教師の対応の改善」と「柔らかな学校システム」間には相関関係 (.39) が確認された。対応モデルの適合度指標は、GFI = .983、AGFI = .942

といずれも高い値が得られ、モデルの適合度は良好であった。

結果は Table 7 及び Fig.4 に示した。

5. 私立教師の因果モデルの検討

因子得点間の相関係数から、支援レベルの「規則の緩和」「教師の対応の改善」から原因レベルの「対教

Table 6 中途退学者の各因子得点間の相関行列

	高校生活への不満	個人的理由	対教師関係	対人関係	規則の緩和	教師の対応の改善	柔らかな学校システム	教師の歩み寄り
高校生活への不満	1	.041	.181 (*)	.046	.379 (**)	.134	.089	-.085
個人的理由		1	.018	.025	.09	-.089	.127	-.034
対教師関係			1	.078	.098	.293 (**)	-.152	.112
対人関係				1	-.022	-.051	.226 (*)	-.023
規則の緩和					1	.101	.395 (**)	.014
教師の対応の改善						1	.087	.051
柔らかな学校システム							1	.158
教師の歩み寄り								1
* p<.05, ** p<.01								

Table 7 公立高校教師の各因子得点間の相関行列

	高校生活への不満	個人的理由	対教師関係	対人関係	規則の緩和	教師の対応の改善	柔らかな学校システム	教師の歩み寄り
高校生活への不満	1	-.051	.097	.07	.029	.181 (*)	.121	-.016
個人的理由		1	.224 (**)	-.097	.043	.187 (*)	.201 (*)	.088
対教師関係			1	.238 (**)	.333 (**)	.415 (**)	.111	.271 (**)
対人関係				1	.093	.135	.167 (*)	.093
規則の緩和					1	-.012	.156	.006
教師の対応の改善						1	.301 (**)	.106
柔らかな学校システム							1	-.087
教師の歩み寄り								1
* p<.05, ** p<.01								

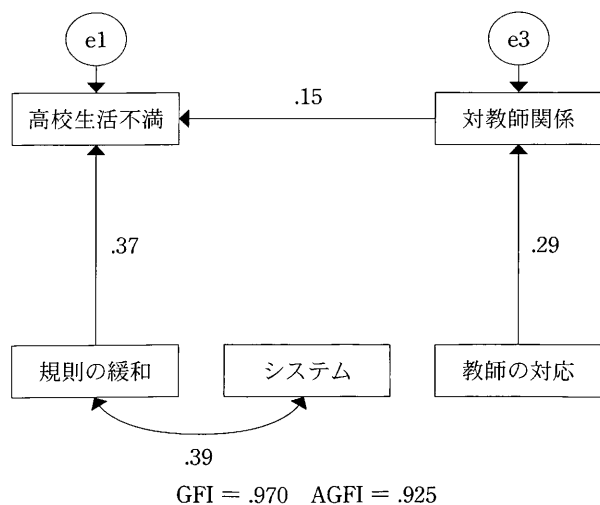


Fig.3 中途退学者の原因・支援因果モデル

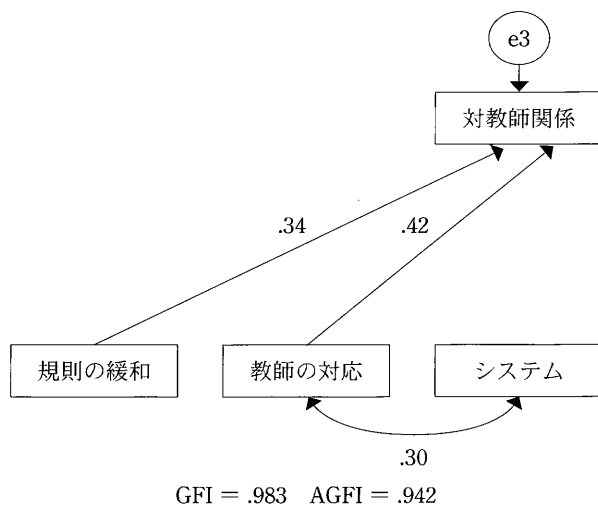


Fig.4 公立教師の原因・支援因果モデル

師関係」及び、原因レベルの「対教師関係」から原因レベルの「対人関係」へのパスを想定した。また、支援レベルの「教師の対応の改善」と「柔らかな学校システム」には相関関係があることも想定した。その結果、支援レベル「規則の緩和」から原因レベル「対教師関係」へのパス (.41) 及び、支援レベル「教師の対応の改善」から原因レベル「対教師関係」へのパス

(.30) が確認された。支援レベル「教師の対応の改善」と「柔らかな学校システム」間に、相関関係 (.33) が確認された。モデルの適合度指標は、GFI = .970、AGFI = .926 といずれも高い値が得られ、モデルの適合度は良好であった。

結果は、Table 8 及び Fig.5 に示した。

Table 8 私立高校教師の各因子得点間の相関行列

	高校生活 への不満	個人的 理由	対教師 関係	対人関係	規則の緩和	教師の 対応の改善	柔らかな 学校システム	教師の 歩み寄り
高校生活への不満	1	-.033	.083	-.037	.196	-.015	.11	.136
個人的理由		1	.052	-.238 (**)	.213(**)	.138	.150 (*)	.023
対教師関係			1	.353 (**)	.408(**)	.289(**)	.135	.124
対人関係				1	.016	.164 (*)	.164 (*)	.086
規則の緩和					1	-.029	.170 (*)	.188(**)
教師の対応の改善						1	.332 (**)	.007
柔らかな学校システム							1	-.168 (*)
教師の歩み寄り								1
* p<.05、** p<.01								

Table 9 保護者の各因子得点間の相関行列

	高校生活 への不満	個人的 理由	対教師 関係	対人関係	規則の緩和	教師の 対応の改善	柔らかな 学校システム	教師の 歩み寄り
高校生活への不満	1	.012	.017	.155	.393(**)	.062	.210 (*)	-.257
個人的理由		1	-.052	.121	.017	.015	.146	-.075
対教師関係			1	.146	.353(**)	.499(**)	.221 (*)	.190 (*)
対人関係				1	-.053	.104	.386 (**)	.048
規則の緩和					1	.092	.136	.077
教師の対応の改善						1	.325	.106
柔らかな学校システム							1	-.010
教師の歩み寄り								1
* p<.05、** p<.01								

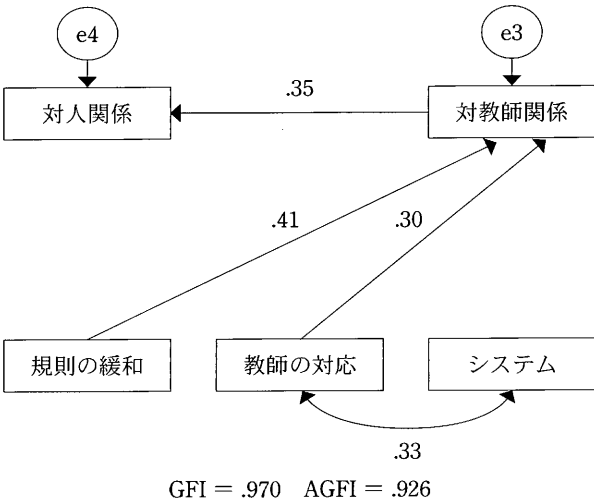


Fig.5 公立教師の原因・支援因果モデル

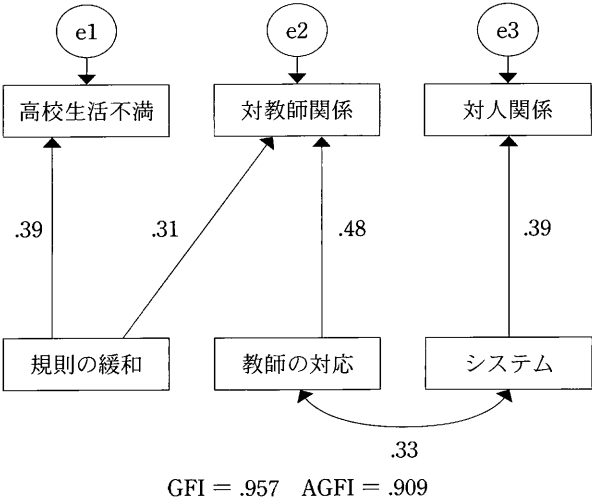


Fig.6 保護者の原因・支援因果モデル

6. 保護者の因果モデルの検討

因子得点間の相関係数から、支援レベルの「規則の緩和」から原因レベルの「高校生活への不満」「対教師関係」へのパス、支援レベルの「教師の対応の改善」から原因レベルの「対教師関係」へのパス、更には、支援レベルの「柔らかな学校システム」から原因レベルの「対人関係」へのパスを想定した。また、支援レ

ベルの「教師の対応の改善」と「柔らかな学校システム」には相関関係があることも想定した。その結果、支援レベル「規則の緩和」から原因レベル「高校生活への不満」へのパス(.39)、支援レベル「教師の対応の改善」から原因レベル「対教師関係」へのパス(.48)及び、支援レベル「柔らかな学校システム」から原因レベル「対人関係」へのパス(.39)が確認された。支援レベ

ル「教師の対応の改善」と「柔らかな学校システム」間に相関関係 (.33) が確認された。モデル適合度の指標は、 $GFI = .957$ 、 $AGFI = .909$ といずれも高い値が得られ、モデルの適合度は良好であった。

結果は、Table 9 及び Fig6 に示した。

IV 考察

1. 中途退学の原因と心理的支援の因果関係に関する生徒の認識

公立高等学校生徒は、規則が厳しいから通学が面倒になったり高等学校の雰囲気にも馴染めなくなったりすると考えるようになり、高校生活に不満を抱き中途退学をしていくものと理解している。また、規則が厳しければ当然、教師の対応も厳しくなり、生徒との間に軋轢が生じ、人間関係が崩れ中途退学に発展していくと考える傾向がある。

他方、私立高等学校生徒は、公立高等学校生徒に比べると、やや複雑な認識を抱いている。規則を緩和することにより、高校生活に対する不満や対教師関係が改善されると考える点は、公立高等学校の生徒と相違はない。しかし、生徒対教師との関係性は、単に、校則を甘くしたり学校生活の自由度を上げたりするなど規則の緩和をするだけでは、生徒と教師との関係性は改善されないと考えている。公立高等学校に比べると、一般的に校則等による縛りの強い私立高校では、生徒に対する教師の対応も、規則に準じて厳しくなる。そのため、私立高等学校の生徒は、教師自身がもう少し生徒を受容し、One Down Position で生徒を受容していく姿勢を示さない限り、教師と生徒のトラブルによる中途退学の予防は難しいと認識している。このことは、教師の異動のある公立高校に比べ、基本的には異動のない私立高等学校の閉塞感も影響していると考えられる。生徒は、教師の動きをよく観察している。教師の世界は一般的に管理職と一般教師という2層構造になっている。教師の独立性がある程度保障されている公立高等学校においては、学年主任・教務主任等の役職は、教師サイドの業務負担量の問題であり、生徒サイドからそのことによる教師の序列は形成されにくい状況にある。しかし、私立高等学校の場合は、異動のない限られた教師集団内において、校長・教頭・教務主任・生徒指導主事・学年主任等生徒からすると、認識可能な序列が形成され、そのことにより、あえて学校秩序を守っていかうとする傾向がある。生徒の立場からすると、教師階層が2層構造になっておらず、多層構造になっている。それぞれの教師が自らの立場を守ろうとする意識的な行為、特に、担任等が学年の

方針を守ろうとする担任の行為（担任が学年主任等上司からの叱責を免れる行為）が、生徒たちにとってはある種圧力に感じてしまうこともある。このことは、杉山、2008（平成20）年の中途退学者へのインタビューでも明らかにされている。同様のことは、私立高等学校における“校風”を守るといいう教師の行為も、生徒に対して圧力として作用することもある。校風は校則を規定するからである。当然、公立高等学校にも、それぞれの校風もあるが、どちらかという、歴史と伝統という言葉に置き換えられて教師に解釈される可能性がある。異動可能な公立高等学校教師は、当然、勤務校の校風や歴史と伝統に誇りを持つことがあっても、そのことで生徒を縛り付ける必然性は私立高等学校教師ほど強くはない。むしろ、私立高等学校教師は、校風を守り伝えていくことが、教師としての職務内容の一部にもなっている。だから、校風を守れない生徒に対する対応も必然的に厳しくなるのであろう。更に、地域からの評価も私立教師は公立教師以上に注目する。異動のない私立高等学校教師にとっては、まさにその学校が生活を支える場である。学校を評判の悪い学校にしたいくないという意識が働くことも頷ける。特に、課題集中校に勤務する教師にはそうした傾向が強い。生徒たちは、こうした事情をよく汲み取っている。もちろん、公立高等学校のすべての教師が、ソフトな対応を生徒に対してしているわけではない。教師の対生徒対応は、教師それぞれの教育理念に基づき、教師の個性の象徴として生徒に反映されるもので、私立高等学校教師は公立高等学校教師に比べ学校体制に影響される可能性が高い。ただ、ここで指摘しておきたいことは、私立高等学校教師は公立高等学校教師に比べ学校体制に影響される可能性が高いということであり、そのことを生徒はある程度察知しているのではないだろうか。

さらに私立高等学校生徒は、教師の対応に問題があると、教師に対して不満を呈する高校生が学校生活に対する満足感が得られなくなり、高校生活に対して無気力になったり授業に対する意欲を喪失したりするなどして、高校生活への不満へつながっていくことを示唆している。

私立高等学校の生徒は、支援レベルで「教師の対応の改善」と「柔らかな学校システム」とは相互に影響を及ぼしあっていると考える。すなわち、教師がもう少し受容的になったり、生徒に目線を合わせたりするためには、杉山、2010（平成21）年が指摘するように、従来の学校の枠組を柔軟なものにし、ある種閉鎖的な学校という枠組みの中に、一般社会人教師や従来の型にとらわれない授業（体験学習等）を導入したりする

ことによって、はじめて教師の態度が柔軟になるし、またその逆もあると理解している。公立高等学校生徒に比べ、私立高等学校生徒の方が、学校内における閉塞感を強く感じているのである。

こうした「柔らかなシステム」の導入は、実は、私立高等学校の方が導入しやすいのである。教育委員会からの縛りを受けない私立高等学校においては、ある程度、学校内の校長裁量で、柔軟な枠組みの設定はしやすい。同じ校長裁量といえども、公立高等学校の場合には、ある程度、都道府県教育委員会からの縛りもあり、他高等学校との横並びの対応を余儀なくさせられる。現場レベルでの教師の自由度と管理職レベルの自由度にはねじれ現象がある。生徒は、常に現場の教師を見ているわけであり、接しているわけであるから、教師の対応の改善（つまり、むやみに虚勢をはらない）は柔らかな学校システムの導入を円滑にし、逆に、柔らかな学校システムの導入（＝学校外文化の導入）により、教師の対応も柔軟性を増すものと考えているのである。

2. 中途退学の原因と心理的支援の因果関係に関する 中途退学者の認識

支援レベルで「規則の緩和」を強く求めるものは、原因レベルで「高校生活への不満」が大きく影響していること、及び、支援レベルで「教師の対応の改善」を求めるものは、原因レベルで「対教師関係」に影響を及ぼしていることについては、生徒モデルと大きな差異はない。

支援レベルの「規則の緩和」因子から、原因レベルの「対教師関係」因子に対してパスが出ていないことに高校生と中途退学者の相違がある。高校生は、比較的シンプルに、規則の緩和により、教師の対応も改善され、柔軟性を増すのではないかと考えている。しかし、中途退学者はそのような認識を持っていない。中途退学により負った心の傷は、少なからず、教師に対するマイナスのイメージを中途退学者の心に残している。高校を中途退学していく経緯の中で、対生徒の前面に立つのは教師であり、そこではそれなりに互いに感情がぶつかり合う。こうしたしこりが、中途退学者の心の中にしみついているとするなら、規則の柔軟性とは別問題である。

また、中途退学者は、高校生に比べるとより客観的に学校システムというものを眺めている。私立高等学校の生徒は、支援レベルで「教師の対応の改善」と「柔らかな学校システム」に相関関係を見出した。これは、目の前にいる教師に対する生徒たちの期待の象徴とも受け取れる。閉塞感が強い学校システムに学校外文化

の新しい風を吹きこむことにより、教師たちも変わってくれるだろう。いや、変わって欲しいという生徒たちの期待が感じられる。しかし、中途退学者はやや遠観している。支援レベルで「規則の緩和」と「柔らかな学校システム」に相関関係を見出している。様々な理由から学校を去り、学校の外の世界から学校を冷静に見つめた場合、まずは、閉塞感の強い学校文化に社会人講師を巻き込んだり授業形態を大幅に改善したりする等の試行が、生徒に対する規則の緩和に直接影響を及ぼすのであり、逆に、規則の緩和なくして、新しい風を学校文化に導入することは困難であることを示唆していると考えることができる。これらのシステム上の改善を前提としない限り、教師の対応の改善は困難であると考えているという解釈である。もちろん、中途退学者自身も、教師の対応の改善を期待していないわけではない。あくまでも、教師の対応が改善されやすいシステムを学校内に導入することが先決問題であると考えている。

3. 中途退学の原因と心理的支援の因果関係に関する 教師の認識

公立高等学校教師も私立高等学校教師も基本的には認識が一致している。教師と生徒の関係性が悪化してしまい、生徒が中途退学していく背後には、規則を守らせなくてはならない、しっかりとした生活態度を身につけさせなくてはならないという、教師の使命感が、教師と生徒とのタテの関係性をより強固にしている。ただ、そうした縛りの中で、自分たちは精一杯やっており、これ以上、教師個人の努力ではどうにもならないと感じている。学校の枠組みをもう少し柔軟にしてくれさえすれば、生徒たちをもう少し受容的な態度で受け入れることができるという認識を抱いている。そして、教師の対応の改善は、学校システムが柔軟になれば可能であると考え、このことは相互に影響を及ぼしあっていると考えている。

公立・私立教師に共通した認識として、自分たちの対応の仕方の問題は学校システムに規定されているという意識である。杉山、2007a（平成19）年は、中途退学の原因レベルで、教師は「対教師関係」因子を強く否定していることを明らかにした。しかし、仮に、「対教師関係」が中途退学の要因として作用するならば、そこには生徒に対して守らせなくてはならない厳しい規則があったり、それに伴って厳しく対応しなくてはならなかったりする自分たちの役割を前提としている。そのような認識を教師が持っていることは、因果関係のモデルから明らかになる。

さらに、支援レベルで「教師の対応の改善」と「柔

らかな学校システム」の導入は連動しているという共通点もある。学校のなかには馴染みの薄い、学校外システム（社会人講師やカウンセラー、さらには、授業形態の改善等）の導入により、教師の生徒に対する対応に変化が起こる可能性を示唆している。教師という仕事に自信と誇りを持ちながらも、やや息苦しい環境の中で、対生徒対応をより柔軟にしたいという、教師のささやかな願望を垣間見ることが可能である。教師はあくまでも組織人として動いているという実態が浮き彫りにされた感がある。

タテマ上教師は、原因レベルで「対教師関係」が中途退学の原因として作用していることを認めたくないのである。このことは、杉山、2007a（平成19）年の調査結果からも明らかである。しかし、自分たちの対応の仕方次第で、生徒の中途退学の原因に何らかの影響を与えていることは実質的には認識している。

教師は社会に対してヘルプを求めている。教師の仕事には、大きく分けて「授業に関する仕事」「生徒理解に関する仕事」「他の教師と協力して組織を動かす仕事」の3つが考えられる。このうち、「授業に関する仕事」と「他の教師と協力して組織を動かす仕事」は、仕事内容は明確であるし、教師としての専門性を発揮できる領域である。しかし、人の気持ちを理解する、つまり、生徒理解については、必ずしも専門的な訓練を受けてきたわけではない。それでも、教師は、生徒の気持ちを理解することは重要な仕事であると当然のごとく考えている。そして、教師は、学力や進路との関係や学校内での行動といった生徒としての側面について必死に理解しようと努める。それは間違いではない。しかし、それでも生徒からすれば、教師は自分たちのことは理解してくれないと思われるのである。思春期特有の、自己にまつわる様々な悩み、迷いや戸惑い、不安や望みが複雑に絡み合い、そのことすらうまく表現できない状態にある若者の心理を、すべて理解しようとするところに無理があるのではないだろうか。

こうした生徒の悶々とした想いは、受け入れることが限界であり、実際、それ以上のことを生徒が本当に望んでいるとは思えない。杉田、2009（平成21）年は、生徒指導困難校に通う生徒と学校とをつなげる鍵は、教師の「友だち役割」にあると言う。例えば、学校の中に社会人講師が出入りし、生徒の気持ちを受容する一端を担ってもらったり、社会人講師による体験学習を通じて、学校内で教師以外の大人とふれあう機会を生徒に提供したりすることにより、教師は今まで学ぶことのできなかった新たな教師役割の方法を学ぶことが可能となる。また、カウンセラーの訪問回数を増や

し、生徒に安心感を与える等、教師と生徒との間にクッションを入れ込み、そのことにより、教師と生徒との人間関係をより円滑にしていくことも、柔軟な学校システム導入の効用といえる。現場教師は今、こうした大胆な変化を求めることにより、自らの意識改革を図ろうとしていると考えることができる。杉山、2008（平成20）年は、各学校内に中途退学予防のための個別支援の場を設置することを提唱する。杉山・松原、2004（平成16）年の実践的研究からも明らかであるが、個別支援の場を設置することにより、生徒の心にゆとりをもたせることができるため、必然的に生徒指導面で教師にゆとりを与える。そのことが教師の意識改革を促進することにつながるのである。

4. 中途退学の原因と心理的支援の因果関係に関する保護者の認識

保護者の認識については、支援レベルの「規則の緩和」から原因レベルの「高校生活への不満」「対教師関係」へのパス、及び、支援レベルの「教師の対応の改善」から原因レベルの「対教師関係」へのパスが出ている点では、私立高校生徒の因果モデルに類似している。しかし、支援レベルの「柔らかな学校システム」から原因レベルの「対人関係」に対するパスが出ていることに注目したい。保護者は、学校での交友関係が円滑であるか否か、学校に居場所があるか否か等に重きをおいていることが理解できる。

この部分に関しては、保護者の学校・教師に対する限らない期待を読み取ることができる。わが国の場合、教科学習以外の面で学校や教師に対する期待が大きい。逆に言えば、何らかの教育的問題が発生すると、学校の責任の範囲が拡大することは、いじめの問題等それが大きく社会問題として取り上げられる事実からも明らかである。本田他、2001（平成13）年や、齊藤他、2003（平成15）年によると、アメリカの学校では、教科指導は教師の役割、相談はスクールカウンセラー、部活動は専門コーチの役割というように、役割分担がなされている。わが国においては、学校内のあらゆる活動の役割・期待・責任が教師に集中する構造になっている。これは、社会の変化が起因しているのであろうが、家庭や地域の責任が縮小した分、学校・教師の果たす責任の範囲が拡大したことは明らかである。生徒たちが、学校に居場所がない、いじめられている、友人関係がうまくいかない、これらの問題は明らかに、生徒をよい大人に育てていく過程の中で、学校だけでなく地域社会が学校との連携の下で解決していかなくってはならない課題である。対人関係形成能力は学校という場だけで育成されるものではない。しか

し、保護者はこうした問題の解決についても、学校・教師に期待していると解釈するべきである。この問題は、学校・教師だけでは到底解決できる課題ではない。従来の学校システムをより柔軟にし、社会人講師を交えたり、スクールカウンセラーの派遣回数を増やしたり、ピア・サポートシステムを導入したりと、学校の中に異物（教師以外の生徒支援者）を混入することによる解決方法を模索していくことが肝要である。教師にできること、できないことをある程度はつきりさせ、あれもこれもではなく、交通整理をすることが、中途退学予防の一端を担うのではないだろうか。保護者の認識は、学校に対する発想の転換を迫ることを示唆する重要な意見として受け止めるべきである。

V 今後の課題

本研究から、高校生・中途退学者・保護者らは、柔らかな学校システムを導入したり、学校が柔軟な姿勢を示したりすることにより、教師の意識変革が促進され、対応が柔軟になるという期待を抱いていることで認識が一致している。そして、何よりも教師自身が、中途退学の原因に関する自分たちの関与を認識し、本当は既成の枠にとらわれず、枠を超えようとする教師でありたいと考えている可能性もあることが明らかになった。つまり、教師は生徒の期待に応えたいと思っているのである。そうした教師の願いを実践できるシステムを、今後、可能な範囲で各高等学校単位で実践していくことが急務であると考えられる。

〈引用文献〉

- 本田恵子・齊藤卓也・久保田須磨 2001 アメリカにおける不登校の指導 教職研修7月 教育開発研究所 17-30
- 文部省初等中等教育局高等学校課 1998 高等学校中途退学者進路状況等調査報告書 一平成5年度公・私立高等学校中途退学者調査一 文部省 1-102
- 齊藤卓也・Barns 亀山静子・西松能子 2003 アメリカにおける不登校へのアプローチ―不登校と回復を援助する法的な取り組み― 精神科治療学 18 (12) 433-440
- 杉田郁代 2009 不登校経験を持つ高校生と教師の関係性の研究Ⅰ―教師と生徒の心理的距離― 児童教育学研究 18 安田女子大学児童教育学会 61-69
- 杉山雅宏 2005 中途退学者の事例に関する分析研究 学校教育相談研究 第15号 日本学校教育相談学会 25-33
- 杉山雅宏 2006 高校教師の中途退学に関する賛否―これからの教師像を模索して― 日本文理大学紀要 第34巻 第2号 日本文理大学 79-87
- 杉山雅宏 2007a 高校中途退学の原因に関する調査研究 研究紀要 第6号 日本福祉図書文献学会 87-100
- 杉山雅宏 2007b 中途退学予防のための心理的支援に関する調査研究 福祉心理学研究 第4巻 第1号 日本福祉心理学会 15-25
- 杉山雅宏 2008 高校中途退学者の本音の分析―中途退学予防のための教師の意識変革の必要性― 研究紀要 第7号 日本福祉図書文献学会 81-96
- 杉山雅宏 2009 中途退学者が語る理想の高校像―中途退学予防のための教師の意識変革の方向性― 研究紀要 第8号 日本福祉図書文献学会 53-64
- 杉山雅宏 2010 高校中途退学予防のための心理的支援モデルについての一考察―生徒の教育可能性と教師の支援可能性の広がり― 人間文化研究所紀要 第4集 東京家政大学人間文化研究所 1-14
- 杉山雅宏・松原達哉 2004 高等学校における不登校生徒への登校支援―特別支援教室における取組― カウンセリング研究 第37巻 第4号 日本カウンセリング学会 359-368
- 杉山雅宏・楡木満生 2010 高校中途退学者の本音―中途退学予防のための心理的支援具体化の方向性を模索して― 福祉心理学研究 第6巻 第1号 日本福祉心理学会 52-60